

WE AVE <sup>ウィーブ</sup> ～若手農業女性グループ～

「WE AVE」は英語で「織る」「編む」などの意味。みんなの力を一つにして、女性らしく明るい取り組みを進めようとの思いを含め、2013年3月に発足した。メンバーの最大の楽しみは忘年会。「この日のためにがんばってきました。」



## 「楽しいのは当たり前！」愛する由仁のまちを元気に

## きっかけ

農家に嫁いできたメンバーが多く、周りは知らない人ばかり。子育てや農業のことなど気軽に話すことのできる「場」がほしい、そんな気軽な思いで立ち上げました。最初は5人でスタートし、その後徐々に口コミなどで仲間が増え、今は15人。年齢は20～30歳代の「若妻」の集まりです。町外から来た方も多く、みんなが集まってわいわい話し、イベントなどに共同で取り組むと、すごく楽しいです。幼い子どもがいる方も多くて、子育ての悩みはもちろん、子ども同士も一緒になって仲良く遊んでいます。

## 苦労

最初は仲間作りから始め、活動も11月から2月の農閑期に、と思っていました。でも2年目以降、イベントへの参加や農産物の直売、他の地域の農家の見学会など、取り組むことがどんどん増えてきて、かなり忙しい状況です。主婦、母親、そして本業の農家の仕事もある中、時間のやりくりで苦労します。最初は「何をやっているんだか」という反応もありましたが、子どもが楽しく過ごせて、愛する由仁の町を元気にするのよ、という思いが伝わり、今ではみんな協力的なのうれしいですね。

## 満足度

WE AVEがなかったら、と考えると、すごく寂しかったと思います。活動範囲が広がって少し忙しい思いはしていますが、お互いに愚痴や悩みを話していると「あぁ、みんなそうなんだな」って安心します。同じ農業とはいっても作物が違えば作業内容が全く違います。「へー、そんなことするんだ」と新鮮な驚きがあったり、すごく参考になるような取り組みも知ることができます。貴重な情報交換と癒やしの場ですね。私たちが明るく楽しく活動することで、由仁町も元気になるのでは、と思っています。

## これから

WE AVEのモットーは「楽しいのは当たり前！」「感動に達成感！」「視野も広がり、笑いあり！」「笑いすぎの涙あり！」です。幼い子どもがいて出歩けない、とマイナスに考えるのではなく、一緒に集まって取り組めばみんな楽しいよ、と常に新規会員を募集しています。みんな、由仁町が大好き。楽しく子育てする町になれば、町も活気づきます。そんな環境で育った子どもは、大きくなってこの町への愛着を忘れません。大きく言えば町の発展のために、WE AVEの活動をずっと続けていきたいですね。

北の★女性たちへの  
メッセージ

人生は楽しだもん勝ちです。どの地方でも「こんなことやりたいな」と思っている女性はいるはず。家庭や仕事の事情で難しいと感じる方もいるでしょう。でも、どんなことでも最初に一歩踏み出さなければ始まりません。踏み出してしまえば、きっと仲間が出てきます。悩む時間がもったいないですよ。

## 空知【赤平市】

うえむら  
植村まみ  
真美さん

日本青年会議所 (JC) 北海道地区協議会 会長

1976年生まれ、赤平市出身。大学卒業後の2002年に故郷に戻り、父親が経営する植村建設に入社。現在取締役。  
最近の写真撮影では「みんな元気になーれ」との願いを込めた、両手を花のように広げたしぐさが決めポーズ。



## 赤平、空知、そして北海道をこよなく愛して全国駆け回る

## きっかけ

2015年1月から1年間、会長を務めています。北海道地区の青年会議所は、48団体、約1,400人で活動しています。北海道は日本の「宝島」です。この宝島をもっと元気にするため、人や地域をつなげて、新しい価値を生み出していくことのお手伝いができれば、と思って、道内と全国を駆け回りました。2014年には、女子会を立ち上げました。「女子会あっても良いよね～」という軽いのりで始めましたが、女性の持つ感性と行動力が会議所活動の新しい活力になるのでは、と思っています。

## 苦勞

北海道地区協議会では初の女性会長ということでしたが、女性だから、と特に苦勞は感じませんでした。でも、すぐに口を出すぶっちゃけた性格なので、周りの男性は苦勞したかもしれません。男性の中にいることが多かったため、女子会を作ってみて、女らしさというか、女性特有の考え方や感性ってこうなんだ、と改めて「女性」を意識しました。女性が団結したときのスピード感や明るさは、男性にはないものです。男性の先を見る思考とうまく融合させることができれば面白い反応が起きるのでは、と思います。

## 満足度

日本青年会議所の役員でもあるため、1年の半分ぐらいは赤平市以外で過ごしました。多くの方との出会い、色々な地域を訪れ見聞きたことは、言葉では表現できないぐらい勉強になりました。青年会議所という組織は異業種の集まりなので、ある意味全国の縮図みたいなものです。活力のある地域もあれば、赤平市のように過疎化が進み、生き残りのみちを模索している地域もあります。でも、どの地域にも「熱い」方がいて、業種や取り組み内容は違って、未来に向けて進もうという強い意志を感じました。

## これから

生まれ育った赤平市を世界に羽ばたかせることが夢です。そのためには、赤平市が子どもたちにとって誇りの持てるまちになることが欠かせません。赤平市産の赤ジャガイモを使った「じゃがール」という商品を7年ほど前に開発しました。この商品を全道、全国に広め、「赤平市といえば『じゃがール』」とイメージしてもらえればうれしいですね。大人が諦めると子どもは夢を持つことはできません。常に夢と希望を胸に、これからもまちづくりと地域おこしに取り組んでいきます。

北の★女性たちへの  
メッセージ

一人で悩まないこと。周りには助けてくれる方、支えてくれる方が必ずいます。人との出会いを積極的に持ち、悩みを共有し、思いを共感すれば、違う道が見えてきます。JCはそんな場として格好の組織ですよ。ぜひ一緒に！

## 空知【美唄市】

うちやま かな  
 内山 佳奈さん 北海道若手女性農業者集団 Links 事務局

1976年生まれ、音更町出身。大学卒業後、美唄市で2代続くアスパラ農家の長男で、当時会社員だった裕史さんと結婚、札幌で生活。自身も結婚後に就職し、広告代理店などの仕事を経験。結婚5年目に農園を継ぐことを決め、2008年から就農。7歳の長女と5歳の長男、2児の母。



## 自由でつながる農業女性たちの交流ネットワーク

### きっかけ

結婚してから5年目の時に、夫が美唄市の農家を継ぐことになりました。農業の経験がない私は不安だらけ。農業を勉強したい、仲間がほしいと思っていた時に、深川市の女性農業者グループの活動を知りました。会場では、農家のお嫁さんや後継者の方たちが、自分たちの作った農作物で料理を作り、市民に提供していました。すごいなぁと思い、主催者の溝口めぐみさんに「お友達になってください!」とお願いしました。その後、一緒にご飯を食べているうちに「もっと仲間がほしいよね」という話になり、2011年にLinksを立ち上げました。

### 苦労

10人少々から始まって、現在は50人ぐらい。農閑期に全道から札幌市に集まって、最初は交流会。そこから講師を招いての勉強会や、メンバー同士のワークショップへと発展していきました。2015年は、札幌市など都市部でのマルシェもたくさんやって、お客さんの反応や商品の価値を実感できるマーケティングの場にもなりました。苦労は、春・夏・秋とみんなが忙しいのでなかなか集まらないこと。メンバーは30代の子育て世代が多く、家事や育児、仕事など、農業という仕事に加え、「女性」として忙しいですね。

### 満足度

Linksは女性で農業をやっている方であれば誰でも加入できて、自分が自由に好きなことができるグループです。農作業をしている時は、基本は誰にも会えないんです。それは寂しいですよ。農閑期の冬に行う札幌市での勉強会や交流会は、全道各地でさまざまなものを作っている方々と出会って話す場です。勉強にもなるし、刺激にもなります。会えない時は、フェイスブックを使って情報交換もしています。「自由でつながっているいい場所だな」という感覚を、メンバーが持ってくれていると思いますよ。

### これから

例えば、ブランディング（顧客にとっての価値を高める戦略）の勉強会では、学んだことを各自のパンフレットに活かすなど、現実面でも役立っています。メンバーの経営を良くしていくために、これからも引き続き交流と勉強を継続していきます。「継続は力」ですから。最近は、経営移譲で夫が経営者になったり、新規就農の方も入ってきていますので、勉強会のレベルを上げたり、幅広くなることが必要になると考えています。あとは、私たちも若手ではなくなってきているので（笑）、次の世代を育てるということをし意識しながら活動していきたいですね。

北の★女性たちへの  
 メッセージ

何かをやろうと思った時がやるべき時です。やりましょう！動きましょう！私は行動することで次の扉が開いてきました。さまざまな経験をする中で、「やって良かったな」と思うことばかりです。結果はついてくるし、間違いだったとしても、そこで得るものは必ずありますよ。

## 空知【夕張市】

きとう まなみ  
佐藤 真奈美さん 清水沢プロジェクト 代表

1979年生まれ、大分県別府市出身。大学卒業後、JR北海道の客室乗務員に。夕張市清水沢地区の町並みに魅了され、退社後に入学した札幌国際大学大学院で修士論文のテーマとする。夫と9歳の長男、5歳の長女の4人家族、札幌市在住。



## 炭鉱町の歴史と息吹を伝え、未来につなげたい

## きっかけ

夕張市との出会いは、15年ほど前です。京都の大学を卒業し、北海道で働き始めたころ、夕張市を訪れました。人気の少ないアパート群を見て、それが炭鉱住宅だと初めて知りました。その後、ずっと心に残っていた旧産炭地域の地域振興を学びたいと思い、2006年、大学院に入学。修士論文は、夕張市内でも炭鉱の面影が色濃く残る清水沢地区を研究対象としました。終了後は炭鉱遺産を活用したまちづくりを行うNPOに所属し、昨年独立。この町との出会いは、私の人生にとって最大の転換点となりました。

## 苦勞

知らない若い人が何かしている、というのが最初の住民の方の反応でした。住民の方にとっては、ズリ山(石炭を掘った時に出てきた不要な岩石を積み上げた廃棄物の山)は登るものではなく、発電所もそこにあるのが当たり前なもの。「何でこんなものに興味を持つのか」と不思議に思われました。でも、幾度となく清水沢地区を訪れ、地域の行事に参加したりするうちに、最初は窓から見ていただけの方々が徐々に近づいてくるようになりました。「よそ者」から少しだけ「身内」に近づいてきたかな、と思っています。でも、この町の住民のほとんどは高齢者です。次を見据えての行動が必要ですね。

## 満足度

この町には炭鉱の記憶を伝える貴重な財産がたくさんあります。赤と青の屋根の対比が鮮やかな炭鉱住宅が整然と並ぶ風景を多くの方に見てもらえるよう、住民の方と一緒にズリ山に階段を作り、今でも年に一度整備作業を行っています。90年前に建てられた旧発電所では、2011年と2014年に現代アートのイベントを開催。JR清水沢駅では、鉄道や夕張に関する展覧会を4年半にわたり開催するなど、炭鉱の記憶がいきいきと伝わるイベントが好評です。

## これから

2015年に夕張市からの補助を受けて、町内会集会所をさまざまな方々の活動拠点にするよう、整備を始めました。今後は、夕張市の石炭博物館などと連携して、この町全体を見学や体験学習を通じて交流ができる「エコミュージアム」としていきたいですね。この町は宝の宝庫です。そのすばらしさを地域内外の方に知ってほしい、そんな思いで一杯です。高齢化が進みタイムリミットはありますが、私自身、この町への興味はまだまだ尽きません。夕張市、そして清水沢地区のファンをもっと増やすために頑張り続けたいですね。

北の★女性たちへの  
メッセージ

炭鉱って豪快な炭鉱マンのイメージがありますが、実は家庭や地域を支えてきたのは女性なんです。イベントの時にも、彼女たちのパワーはすごいです。強くて頼りになる女性たちが築いてきた、炭鉱の町の歴史と今の息吹を多くの方に伝えたいですね。ぜひ清水沢へどうぞ。意外とはまりますよ。



## 株式会社砂子組

1946年創業。奈井江町に本社、札幌市に本店を置き、土木、建築工事を全道展開する。高い技術力で、北海道開発局長表彰を幾度も受賞。2009年度からは、他社に先駆けて情報化施工を実施。建築現場でも導入を進め、IT技術を活用した高効率・高精度な工事を実現している。



## 地域とともに、そして女性が生き生きと働く企業に

### きっかけ

新卒の女性技術者を採用したのは、2014年から。建築分野ではすでに中途採用の技術者がいますが、今回は土木分野での採用です。女性だから、ということではなく、企業として持続的な発展を実現するためには、若手技術者の確保が難しくなる中、男女を問わず優秀な人材を確保・育成しようという方針に沿ったものです。当社では、土木と建築分野で約60人の技術者がいますが、このうち女性は土木で2人、建築が5人の計7人です。新卒の女性技術者が入ったことで、今後の女性活用の素地ができたのかな、と考えています。

### 苦労

若手技術者は、学部・学科を問わず募集してもなかなか応募がありません。当社だけではなく、建設業全体がそうではないかと思えます。建設業のやりがいや魅力を、もっと効果的に教育の現場や社会に伝え、幅広く人材を確保する体制が必要です。女性に関しては、結婚に伴う夫の転勤や、出産、育児など、仕事を続けることの難しさが現実としてあります。育児休暇などを就業規則で明記していますが、「みんなに迷惑をかけるのでは」と本人が負担に感じないよう、本人の事情や性格などを踏まえたケースバイケースの対応が必要だと考えています。

### 満足度

当社の女性技術者はみんな、熱心で一先懸命学ぼうとする方ばかり。男性だけだと、ある意味無頓着にやっていたことを改善するきっかけにもなりました。教育訓練なども、「背中を見て覚える」的な考え方から、教育体系をしっかりと確立することで、男性の若手技術者にとっても効果的な教育ができるようになったのでは、と思います。また、男性だけの現場に女性がいると場が「和む」のも事実。工期が詰まってくると現場の緊張感が高まりますが、そんな時、彼女たちの存在は貴重ですね。

### これから

女性技術者の雇用は今後も継続していきます。環境整備の一環として、女子寮を整備したほか、2015年4月には「SG-L-net」(砂子組グループ・レディーズ・ネット)を立ち上げました。女性技術者の視点での知識や技術力向上を目的に、現場研修や勉強会の開催などに取り組んでいます。2月に開催された「建設業女性活躍推進フォーラム」にも、2年目の女性技術者がパネリストとして参加しました。また、当社では、情報化施工など、ICTの導入も進めています。こうした最新技術は、若い方が興味を持ち現場で活躍できる分野では、と考えています。

### 北の★女性たちへの メッセージ

建設業の現場は自然が相手の仕事です。厳しい反面、仕事の充実感と達成感は格別のものです。当社は、社会を取り巻く「変化」に柔軟に対応し「進化」を続けています。会社を媒体に自分のやりたいことができる社風があります。新しいことにチャレンジし、自分を活かしたい方、ぜひ一緒に！

## 石狩【千歳市】

あべ みやこ  
阿部 都さん エルム楽器千歳支店 ピアノ調律師

1983年生まれ、札幌市出身。2005年に静岡県の専門学校を卒業し調律師に。4年間の東京都での生活を経て、エルム楽器に入社、千歳支店に配属となる。2013年には、作家の宮下奈都さんが調律師を主人公とした「羊と鋼の森」を執筆する際、取材を受け、巻末の謝辞に名前が記された。



エルム楽器千歳支店のスタッフ

## さまざまな音の色、心に響かせたい

## きっかけ

5歳からピアノを習い始めました。年に1回調律師が来てくれたのですが、作業風景が印象的で、調律後の音もとても好きでした。「こんな仕事があるんだ」と心に残りました。高校卒業後は、子どもに印象に残った調律師になりたいと、専門学校に通いました。4年ほど東京の楽器店に勤めましたが、やっぱりふるさとのほうが良く、北海道で仕事を、と思っていたところ、縁があってエルム楽器千歳支店で勤務することになりました。ある程度の経験は積みましたが、思ったような音色を表現するために毎日が勉強です。

## 苦勞

調律は、経験で得ることのできる技術に加え、音の「センス」が求められます。弦をたたくハンマーは羊毛を固めたフェルトでできていますが、使用するうちに硬くなっていきます。このフェルトに針を刺すことによって、弾力を取り戻し、幅広い音が出るようになります。でも、針を刺す作業のやり方は、調律師によって異なります。音を合わせることは基本です。ピアノの個性を活かし、弾く方が望む音を出すためには、センスが問われます。センスを磨き高めるためにはどうしたらいいのか。作業以外の時も、頭の中で求める音を探しています。

## 満足度

最近では、住宅事情もあるのか、アコースティックピアノよりも電子ピアノを選ぶ方が増えているのかもしれませんが、音のなめらかさや豊かさ、深さではアコースティックが優れています。おばあちゃんからお孫さんに引き継がれたピアノを調律することもあります。お客様によって音の好みは違います。ピアノによっても出る音の彩（いろどり）は異なります。お客様と会話しながら、一番良い音を調律し、「いい音だね」「弾きやすくなったよ」と満足していただけたときは、充実感があふれます。

## これから

調律師になって10年が経ちました。「音」が好きなのでこの道を選んだことに迷いはありません。音の表現は無限にあります。その無限の中で、私が調律した「音」に弾いた方や聞いた方がわくわくしてくれるように、人間としての幅を広げる必要があると思っています。これから結婚や出産を経験すれば、センスを磨き、高めることにつながるのかな、と考える時もあります。理想は、例えば「ろうそくの火を見ると、私の音が思い浮かぶ」、といったように「目に見える音」を表現することですね。

北の★女性たちへの  
メッセージ

調律師に男女の差はないと思います。あるのは「個性」ですね。音の世界は奥深く、10年経っても「高み」はまだ彼方です。でも、自分だけの音を作ることができる楽しさと、それが実現し、喜んでもらえるときの満足感は格別です。音を「奏でる」調律師の世界に、ぜひあなたも。



## 株式会社ダイナックス

「未来を今に」という企業スピリットをベースに1973年に創業。独自の技術力を創造することで、世界の先進企業との競争に打ち勝ち、国内シェア1位、世界シェア2位を確保する世界水準の企業に成長した。2014年には経済産業省の「グローバルニッチトップ企業100選」にも選定された。



## 生き活きと働く女性とともに世界水準のブランド企業へ

### きっかけ

女性は貴重な戦力です。「女性だから」という考えはありません。出産や子育てで退社してしまうことは会社にとって大きな損失です。2002年には本社敷地内に保育園の「ダイナックスこどもくらぶ」を開設し、仕事と育児の両立をサポートしています。保育園開設は、当時の社長の判断。当時、道内ではこのような取り組みはありませんでした。トップのポリシーは「人と同じことをやるな」でした。この考えの一端が保育園の開設・運営にも現れています。

### 苦勞

女性技術者はまだ若い世代が中心で、これから結婚や出産、育児を経験する方が出てくると思います。こうした方たちに加え、新しく入ってくる方たちが、楽しく働き続けるためにはどのようなキャリアプランを示せば良いのか、処遇や教育などをしっかりと考え、実施しなければなりません。また、苫小牧市にも工場を持っていますが、ここには保育園はありません。一般の保育園は満員でなかなか入れず、千歳市と苫小牧市のバランスをどのようにとるのが課題です。

### 満足度

保育園だけではなく、法定を上回る短時間勤務制度、所定労働の制限、フレックスタイム制、夜間の交代制免除など、柔軟な勤務制度を導入し、利用されています。我々の仕事はものづくりです。ものづくりの技術は、一朝一夕には育ちません。長く働いてもらい、技術を磨き、次世代に伝えてこそ、世界水準の技術が継承されます。制度の充実と、それを利用しやすい職場環境、そしてハード面での保育園の存在があることで、能力のある女性の力を存分に発揮してもらっています。

### これから

11月開催されたビジネスEXPOでは、今回はじめて「ものづくりなでしこ」ゾーンが設けられ、当社も出展しました。お話しした学生さんからは「ものづくりに対するイメージが変わった」という反応もありました。千歳市や苫小牧市の高校などに出前講座に行っていますが、生徒の方と実際に話すと、会社の取り組みをわかりやすく伝えることができ、その後会社を訪ねてきた生徒もいます。さまざまな取り組みや行事に参加して、人を大切にする当社をアピールし、優秀な人材を確保していきたいですね。

### 北の★女性たちへのメッセージ

ものづくりは「男性」、というイメージがあるかもしれませんが、そうではありません。女性が持つ感性や積極性は、ものづくりの場で十分に発揮できます。当社も将来を託せる企業としてさまざまな取り組みを進めています。ぜひあなたも私たちと一緒に「ものづくり」しませんか。



## 合同会社のこたべ

2007年に平島美紀江さん(左写真前列中央)が市民団体「北海道子連れプロジェクト」を立ち上げ、同年、食育フリーペーパー「のこたべ」を創刊。その後、合同会社とNPO法人を設立する。現在は、コープさっぽろの広報誌「Cho-co-tto(ちょこっと)」の編集も手掛ける。



## 食の素晴らしさを次世代に繋ぎたい

### きっかけ

旅行情報誌で営業職をしていましたが、出産を機に退社しました。でも「出産から育児を通じて得た自身の経験を生かしたい」と思い、フリーで、円山動物園での子育てサロンや、お母さんのための料理教室、主婦の再就職セミナーなど、さまざまな活動に取り組みました。2007年1月には、市民団体「北海道子育てプロジェクト」を設立しました。同年、食育をテーマにしたフリーペーパー「のこたべ」を創刊。その後、スポンサーだったコープさっぽろが発行する広報誌「Cho-co-tto」の編集も手掛けるようになりました。

### 苦勞

3万部を発行する「のこたべ」は、フリーペーパーなので、掲載するスポンサー集めが大変でした。冊子のコンセプトは「地域で子育てをもっと楽しく」です。子育てがちょっと楽になったらいいなと思っています。スタッフは、全員子育て世代のお父さん、お母さんです。運動会や授業参観などの学校行事や家事を優先してもらい、それぞれ協力しながら取材・編集に当たっています。それでも、まだまだ世間は男性社会です。ワークライフバランスを確立させ、次は世の中を変えたいと思っています。

### 満足度

「のこたべ」創刊時は、取材から編集、営業まで1人でこなしてきました。事業拡大につれてスタッフは8人に増員。編集作業も充実してきました。2015年8月には「とうちゃん のこたべ」を創刊。公園で遊ぶ、畑ドライブで遊ぶなどのコンテンツを設け、仕事も家庭も頑張るパパに贈るフリーマガジンとして好評を得ています。一方、コープさっぽろの広報誌「Cho-co-tto」は、旬の食材をテーマに、生産者のインタビューから地域の料理家が紹介する料理コーナー、くらしに役立つ生活情報などを掲載しています。

### これから

「のこたべ」とは、残さず食べるという意味です。これは昔から言われてきた大切なこと。食育の意義と重要性を改めて感じてほしいとの願いを込めました。「Cho-co-tto」と併せて、読者の皆さんと一緒に日常生活が楽しくなるような紙面を創りあげていきたい。昨年からは、恵庭市内の農家に協力をいただき、札幌市内の高校と一緒に野菜の収穫から仕分け、箱詰め、店頭販売といった一連の作業を体験する新たな食育プロジェクトを立ち上げました。これからも食の素晴らしさを次世代に繋いでいきます。

北の★女性たちへの  
メッセージ

食に携わるすべての生産者のファンになってもらいたい、との思いで編集しています。食が豊かだと、幸せな気持ちになります。食がおいしいと、家族が笑顔になります。1人の子どもに対してたくさんの大人が関わっていけるような社会にしたいですね。



## 後志【神恵内村】

いけもと みき  
池本 美紀さん 民宿きのえ荘 女将

1977年生まれ、神恵内村出身。岩内高校卒業。銀行勤務を経て、結婚後、夫とともに民宿きのえ荘を開業。「きのえ」は祖母の名前が由来。二人の子どもの子育てをしながら、女将、神恵内村魅力創造研究会のメンバーとして活躍中。



## 子育てと女将を両立させながら神恵内の魅力を発信

## きっかけ

3年ほど前に、友人6人で神恵内村魅力創造研究会を作りました。みんな、神恵内村が大好きで、これまでのように「村に何かをしてもらう」のではなく、「自分たちが何かをしよう」とスタートしました。とりあえず、無料で宣伝できるフェイスブックを利用し、当初は1か月100人の「いいね」、次に、村の人口の950人を目標にしてみました。今では1,500人を超えています。とにかく「神恵内」という名前を知ってもらうために、開設以来、毎日更新しています。

## 苦勞

村のことを知ってもらいたい、もっと観光客に来てもらいたいと思っていますが、どんどん人口が減少していく中で、神恵内村だけ単独で何かをやるという時代ではないと思っています。後志地域には、ニセコ地区はじめ、山と海の素晴らしい観光資源があります。他の地域と連携し、「つながる」ことで、神恵内村を押し出していきたいと思っています。女将としては、小学生と2歳の娘の子育て真っ最中で、下の子どもをおんぶしながら厨房に立つこともあります。これも一時の事と思い、頑張っています。

## 満足度

神恵内村のことを、たくさんの方に知ってもらいたいと活動していますが、埋もれつつある、郷土の文化伝承にも取り組んでいます。神恵内村は昔、陸の孤島と言われ船が主な交通手段でした。当時は、肉の入手が困難で貴重なタンパク源として、カレーライスにはサクラマスを入れて食べていましたが、今では、逆に珍しくなっています。そのサクラマスカレーの普及と、村独自の歌詞と振り付けのある「神恵内音頭」の伝承のため、盆踊りの復活にも取り組んでいます。盆踊りの復活は、子どもたちだけではなく村の高齢者の方々にも好評です。

## これから

神恵内村には、港で揚がる海産物を買える場所がありません。観光客も、他の町で買って来た食材、飲み物を神恵内村に持ち込んで宿泊するという現状です。今、村の資源や商品をもっと知って頂き購入してもらえる手段はないかと検討しています。民宿としては、2004年の台風18号で被災し、一時、この商売を続けるかどうかで悩みましたが、縁があり現在の場所に移転し、周囲の応援も受けながら現在に至ります。後志地域に来るたくさんの観光客の方に、少しでも神恵内村まで来て頂く受入れ態勢や仕組みが出来ないかと思っています。

北の★女性たちへの  
メッセージ

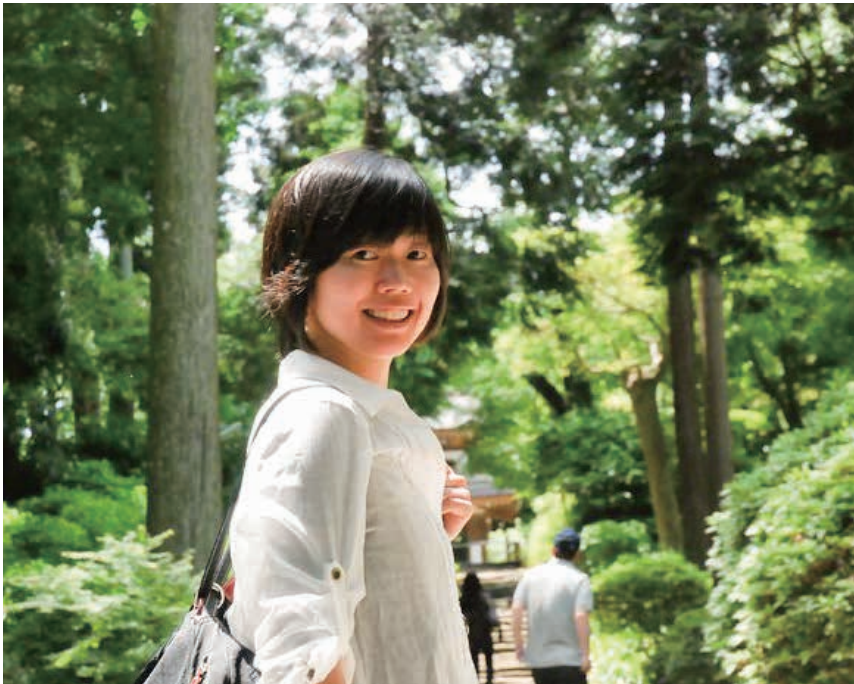
大変な時は一時だけ。大変な時、辛い時が、永遠に続く訳ではありません。私は、周りの方々に助けられ、子育てと女将業を両立させていますが、辛い時期が過ぎれば、また、違う景色が見えてくる、そう思って笑顔を忘れず頑張っています。

## 後志【余市町】

さかもと  
坂本じゅんか  
純科さん

NPO 法人北海道エコビレッジ推進プロジェクト 理事長

1967年生まれ、東京都出身。北大農学部卒業後、札幌市役所に13年間勤務。退職後はNPO活動に従事。2006年に渡欧、約3年間滞在し各地のエコビレッジを探訪。帰国翌年に長沼町でエコビレッジライフ体験塾を開講。2012年にNPO法人化し、拠点を余市町に。札幌市在住。



## 余市を拠点に、理想の実現へ一歩ずつ

## きっかけ

大学の寮生活と、社会に出てからのルームシェア体験が、共同生活をポジティブに考えるベースになっています。24歳の時に、長期入院するだけを経験してからは、海外の障がい者施設へ車いすを届けるNPO活動に参加するようになりました。市役所では、公園の設計を担当していましたが、住民と関わる中で、縦割りの政策による社会課題の解決に限界を感じ、民間での活動を本業にしようと2004年に退職しました。エコビレッジはその頃から関心があった、実際の運営を知るためにヨーロッパへ行こうと思いました。

## 苦勞

英国の大学院に籍を置いて、ヨーロッパ各地のエコビレッジを訪ねました。必要なものを自分たちで創りながら共同生活を営み、限られた資源をシェアし、福祉や子育てのサポート体制も整備されています。住民同士が助け合うコミュニティは、社会的に意義があることだと確信しました。帰国後に「まずは仲間づくりと情報発信」と考え、長沼町の体験塾を立ち上げました。多彩な人材が集まり、小規模ながら米や野菜づくり、小屋の建築体験など活動が充実していききましたが、次のステージに進むには、生活空間としての土地探しとお金が課題になりました。

## 満足度

幸い、友人の紹介で余市町の果樹園を好条件で借りることができ、2012年に6ヘクタールの土地での活動がスタートしました。2014年度には「余市エコカレッジ」を開講、研修棟として使う「学び舎」も完成しました。2015年度は、近隣の生産者とのチーム体制が築かれたことが大きな前進で、養鶏、養蜂、ワイン醸造など体験プログラムの幅が広がり、参加者の満足向上にもつながりました。研修事業では国内外の大学や団体のほか、中高校生の修学旅行も6校28人を受け入れ、農村環境での学びに対するニーズの高さをあらためて確認できました。

## これから

私は、集まって住むことが北海道の地方再生のヒントになると考えています。当NPO法人の会員さんは都市部の方が多く、週末畑に通う方、夏の間来る方、作物を買って応援してくれる方など、関わり方はそれぞれです。多様な参加の機会を大事にして、つながりを広げていきたいと思っています。2016年3月には、宿泊棟となる「シェアハウス」が完成し、滞在型の研修や移住定住促進に向けた環境整備も進んでいます。一方で、畑の管理や事務局などの基本的な部分がまだ弱く、プロジェクトを担ってくれるスタッフを増やしていくことが直近の課題です。

北の★女性たちへの  
メッセージ

北海道は新しいことを受け入れやすい土地。私が外国から帰ってきて、両親や友人がいる本州ではなく北海道を選んだのはそれが理由です。新しいものをゼロから創れる場所。特に「小さく始める」みたいなことに女性は強いと思うので、楽しみがたくさんある土地だと思います。

## じゅうごばあ ～ニセコ食品加工研究サークル～

ニセコ町の社会講座で地元食材の加工勉強を行ったのが始まり。2008年には洞爺湖サミットに協力出店。10年に地産地消と地域活性化の功績で町、道、国土交通大臣から相次いで表彰を受ける。現在の会員は、30代から80代までの20人。



## 地元産品を使った「お母さんの料理」を伝承

## きっかけ

15年ほど前にニセコ高校の女の子たちと、ニセコ町でペンションを営んでいた西野洋子さんのところへ“じゃがいもの食べ方”のお勉強に行ったのが最初。西野さんとは、農村文化・食文化振興の講演も聞きに行き「ニセコでもしたいね」と共鳴し、研究を始めました。町民センターを利用したかったため、2002年に食品加工研究サークルとして町の文化協会に入りました。最初の作品は、規格外で捨てられているトマトを使ったトマトスープやジャムでした。

## 苦勞

7年ほど前、いもだんご汁を作り始めた頃、東京都のレストラン経営者から「ニョッキをやってみないか」と言われて、8か月の間、注文を受けて送ったことがあります。ニョッキはイタリア料理の一種でジャガイモと小麦粉を混ぜて作る団子のこと。大量の発注に応えるためにがんばりましたが、この作業に時間を取られ、まるで「女工さん」状態。それぞれ家事の負担もあるので、家内工業では限界があると判断して、ニョッキの生産を断念したことがありました。

## 満足度

2004年に、ニセコ町の家庭料理を持ち寄って、町民に呼び掛けて「食の展覧会」を開きました。予想を上回る120品が集まって、その時のメニューを本にまとめました。そうしたこともあって「この会、面白そうだ、料理を覚えられそうだ」と会員が増えました。「じゅうごばあ」は、2007年にホテル甘露の森とのコラボで2か月間昼食を出店した時にメンバーが付けた名前。当時はメンバーが15人いて、加工研だと固いイメージがあるので、この名称になりました。「ばあ」という響きには少し抵抗がありましたけども(笑)。

## これから

ニセコ町内で始まったことだから、町の方々に愛され、地域に密着しているということが大事だと思います。私たちが覚えていることを「教えて」と言われたら喜んで伝えてあげます。教えた方からは「とても美味しい」「また作りたいな」と言ってもらえるので、こちらも張り切ってしまう。今は幼児センターのお母さんたちに魚のさばき方を習いたいと頼まれています。若い方にも「じゅうごばあ」に入ってもらって、地元のおいしい「お母さんの料理」を伝えていってほしいですね。

北の★女性たちへの  
メッセージ

今は子育てしながら働く時代。私たちは「来られない人は来なくていいの、来られる人で集まるから」というグループ。互いに交流を深めて地元の料理を作れる方を増やし、この活動を受け継いでほしいと思っています。